

## 烏森トレッキング回想記

### 第十回

日時：'03. 5. 24 (土) ~ 5. 25 (日)

概略行程：

1日目 奥多摩駅～氷川キャンプ場／飯盒炊さん～桃沢～（おくたまむかしみち）～奥多摩湖／水根～奥多摩駅～御岳～ 宿泊／登奈利荘

2日目 日の出山～松尾～つるつる温泉～武蔵五日市駅

メンバー；米本、山田、吉川、小林、森、磯崎

出席予定の会頭が、風邪引き後の大事を取り欠席し、小林氏は所用にて2日目からの参加となる。

前々日迄の天気予報に、“終に我らも悪運尽きたか、いくら何でも今回こそは雨中の歩き”と覚悟する。

しかし、前日夕になっても、なお陽射しが残り、“ひよっとすると、ひよっとするのでは”と、密かに期待。一念発起し、照る照る坊主に脅しをかけると、その甲斐あってか、雨は降らずで微かな陽射し。

今回は、奥多摩西北部の谷間い集落、<sup>につばら</sup>「日原溪谷」に入り、新緑揺らす五月の風に吹かれながら、「溪流釣り」と「バーベキュー」、更には、「日原鍾乳洞」見学で遊ぼうと計画したが、はっきりとしない雲行きもあり、またもや予定を変更。

初日は、氷川キャンプ場での「飯盒炊さん」と、“おくたまむかしみち”、残り1/3のウォーキングとし、2日目は、「日の出山」を山越えし、山の出湯、「つるつる温泉」への立ち寄りと衆議する。

【余談22】今回初めて、無記名による、「希望コース」のアンケートを採った。

前述コースは、いずれも圧倒的支持（3/4）を得たもので、適度な汗欠きに、アウト・ドアの楽しみを加味した内容が選択された。多数決で決められるものではないが、今後の参考にしたい。

因みに、初日の残る1票は、予定通りの「日原溪谷」、2日目は、「鳩ノ巣裏参道下山」。汗を滴らせてのフル登山は敬遠された。

急な炊飯メニューは、「カレー・ライス」と決め、全員で、「スーパー小川屋」へ買い出しに。

副食として、米本流、「野菜サラダ」と、森流、「舞茸のホイール焼き」が加わり、食材を抱えて、巨樹、「奥氷川神社・三本杉」脇を抜け、「森林浴コース」を氷川溪谷へ歩く。

竈を、何時もより、若干、川下に立て、今回の竈人は、会頭に代わって吉川氏。

いずれの料理も上々の出来と思われるが、量的課題を次回に残す。とりわけ、炊いた飯が2Kgは、よくよく計算すると1升4合、一人当たりでは三合弱の並外れ。

“販売最小袋がそれ”と、かばう意見もあるが、捨てるに忍びず、「握り飯」とし、全員に配給。

**熱き友情によるものか、それとも…、小林氏にも是非賞味して欲しいとの声多く、同氏の分も確保する。**

【余談23】定かでないが、学生、部活時代の一人当たり飯盒量は、朝・昼は1合、夕は2合見当と記憶する。年齢、運動量に相違はあるが、今現在で考えると大変な量で、“やせの大食い”と云う格言があるが、言い得て妙であった。

いつもの通り、予定時間以上の長い食事を終え、残り1/3の“むかしみち”へと、奥多摩駅から、「桃沢」へバス移動。

広い旧青梅街道の道脇に、“みち”の取り付きを見つけ、急坂を登る。

歩き始めには、少々きつい勾配であるが、頭上を樹々の繁りが覆い、爽やかさを満喫。

登る途中で、来た道を見下ろすや、遙か彼方、「惣岳溪谷」方面から、我らが後を追うメツチェン一人、色鮮やかなセーター姿が眼に眩しい。

坂を登り切ると、正面、西方向の葉陰越しに、「小河内ダム」の放水路急斜壁が忽然と姿を現す。ダム規模小体とは云え、それなりの雄壮さを見せ、区切りも良しと一休み。

谷から吹き上げる涼風が心地良く、胸を膨らませて大きく深呼吸。

**間無く追いついたメツチェンに、さあさあどうぞと、道を譲るは我らの礼節、通り過ぎるや、“意外に中高年”、とばかりに顔見合わせるは我らの性根。**

更に続く“みち”を、“もうすぐ”、“もうじき”、“あの角曲がれば…”、“その角過ぎれば…”、“さあ着いたかな”、“もう着いたかな”、とメンバーを励ますが、敵もさるもの、“心臓が飛び出しそう”、と任意（勝手に）に一本立てて、昔話に花を咲かせるマイペース。

【余談24】“メツチェン”は、もちろんドイツ語の、“娘さん”。

山の言葉の多くはアルペンスイスを背景に、現在でも多くのドイツ語を残す。e x. コツフェル（調理容器）、シュラフ（寝袋）、ケルン（石塚）。

“一本立てる”は、“小休止する”の意で、重い荷を背負ったまま、ステッキ（ピッケル）

を尻にあてがい、立って休む様子を指すとのことで近時知った言葉である。

祠の小さな「<sup>せんげん</sup>浅間神社」を右手に見遣り、山上の集落に無事到着し、民家軒下の石垣上に荷を降ろす。

規模は少体であるが、眼前、山斜面には、「棚田」が切り開かれ、目一杯植えられた野菜や花々の種類をなぞりながら、またまた、“小さな旅”の世界に浸る。

“みち”は再び、尾根を巻く「山道」となり、“荷を背負う馬には死をも覚悟する難路であつたろうに”と時間を巻き戻しながら、急な左手山裾を鉄柵で守られた古道を辿る。

間無く、大きく視界が開け、左手の山麓側には小河内ダム・奥多摩湖取水部が俯瞰され、右手の山上には、寄り添い合う二軒の民家を見る。

メンバーに、“みち”の終わりが近いと告げるや、吉川氏が突然に、“ここは昔、友人と来て、見知らぬ民家で一夜の宿を世話になった憶えがある”と、遙か以前の記憶を蘇らせ、一瞬、皆の脳裏に、セピア色の世界を呼び起こす。

“みち”の最後に、水根キャンプ場内の「むかしみち休憩所」に立ち寄り、“おくたまむかしみち”の全行程を無事踏破。

湖畔のバス停に並び、奥多摩駅行きのバスを待つ。

期待した臨時バスは、すでに時間帯を過ぎたのか、来る気配が無く、宿入り時間の遅れを女将に一報。

なお明るい湖面の輝きを見つめながら、水不足により一時撤去されたと聞くドラム缶橋の現況は如何と、水量を目測する。

「登奈利荘」には、いつもの約1時間遅れで到着し、早速、汗を流し、浴衣に着替えて宴の席に。

今日の女将は、やけに慎ましやかで、“本日は、「岩魚」が入手できましたので”、と三指ついて口上述べると、何故か視線は鴨居に向かったり、台所を振り返ったりと宙に舞う。

その後も控えめな応接が続き、“ひとつカラオケでも”との、いつもの明るい誘いは一切無し。

とは言え、料理の旨さに変わりなく、いつものように、ワイワイ、ガヤガヤ楽しい宴。

部屋に引き揚げ、宴の再開。テーブル中央に、奥多摩駅購入の角瓶を据えて、準備は万端、さあ飲むぞ！

しかし、何故かメンバーに元気なく、杯進まず、会話も弾まず。

女将の策が奏功したか、あるいは、TVに映る阪神タイガースの苦戦を観るに偲びずと、早々と床に就く、一部メンバーのせいと云うは、お門違いと失笑あるか。

翌早朝5：00前、一部のメンバーが早起し、「武蔵御獄神社」で厄払い？ 別に、ロック・ガーデンを一周する寝惚け者も約1名。

空気は清澄、鳥の囀りは耳に爽やかで、朝露に濡れた枝葉の緑が鮮やか。

早、何組かの泊まり客が逍遥する長尾平の木テーブルに休み、厄払い人が炒れてくれたドリップ・コーヒー飲みながら、至福の時をゆったりと過ごす、旨い！

朝食を終えた9：00少し前、小林氏が旅荘に合流。**早速、「おにぎり」を手渡し、「日の出山」へ、いざ出発と荷を背負う。**

皆まで訪れる「日の出山」は第二回目以来で、木の根踏んだり躓いたり、じゃれ戯れながら、左手尾根側に広葉樹を、右手谷側に杉林を見ながら、起伏少ない尾根沿い道を辿る。

山頂間近の急坂を登り切ると、辺りの視界が一挙に拡大、左手に、「東雲山荘」を、右手に、日の出山々頂への石段を見る。

周囲は広葉樹の森となり、緑に深み増す若葉の輝きに、これも良しと眼を細め、登山道脇に群生する豊かな山野草を見分けて、疲れを癒す。

早朝の山頂に、人影はなし。

密かに期待した眺望は、案の定、「御岳山」辺り迄で、富士は無論、新宿都心方面も霞の中。

階段状の木ベンチに座り、お湯を沸かしてコーヒー・紅茶を、又一杯。昨夜飲み残したウイスキーを滴らす御仁もあり。

やがて、御岳、五日市／上養沢・松尾と、各方面からの登山者が到着し始め、山頂は、いつもの賑わい風景を取り戻す。

木ベンチを譲り、南東方向に、「松尾」への登山道を探し、下山に掛かる。

急坂を息切らしながら登って来る人々に挨拶を交わし、鳥の餌付け台を見つけては、**「握り飯」を“馳走”する。**

約1時間、久し振りの長い下りを無事クリア。もっとも、その後が続く、「つるつる温泉」への林道歩きの方が、脚には厳しかったかも。

温泉前の路上売店に、「ロン・ヤス団子」を見つけて大笑い。

中曽根／D・レーガン、日米首脳による、「日の出山荘」での、“水入らずの歓談”を記念してのものと思われるが、商魂逞しいと云うべきか…、**後から来るメンバーに指さし知**

らせて、笑いを引き継ぐ。

(D・レーガン氏 ‘04. 6. 6 永眠、合掌)

初めての温泉メニュー、「つるつる温泉」。

日の出山々頂を始め、至る所に、下山後の入浴を誘う広告看板を立て、よほどの大資本経営ではとの、「噂の館」。

早い時間帯のためか、下山客より車で訪れた一般客が目立ち、客の溢れる「温泉」は、「山のいで湯」と言うより、「ヘルス・センター」の様相と云うは、見当外れの“コンキチキン”、か？

ただ、芋を洗うが風景に、湯の循環具合を気にするメンバー複数名。

浴後の昼食は、畳敷きの大食堂。

地元の山菜を素材とする「釜飯し」は、お薦め通りの味良しで、値段も手頃な値打ち物。その上、給仕してくれる娘さんは、微笑が溢れ、元気滂刺、明るい返事。

意外なるかな、経営母体は、「日之出町」と聞き、それまでの不思議理由も氷解するが、娘さんが日之出町職員とは驚木、桃の木、山椒の木！（弾むと、何故かこうなる！）

温泉発のレトロな乗り合いバスに乗り、五日市線／武蔵五日市駅へと向かう。

車中、「温泉入浴」に、「アルコール」が入ったメンバーの眼は心なしか微睡み気味も、到着直ぐにホリデー快速、「新宿行き」の・を得、帰宅に向かう。

拝島で八高線利用の山田氏と、立川で中央線利用の吉川、小林、森の各氏と別れ、今回のトレッキングも無事終了。

（中央線は、またもや事故で停止中。幸い、直ぐに動き始めたようだが、なんともトラブル多い問題幹線）